

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPOINT
2018.9. VOL.37

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

技 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

和 お知らせ
Information

「名古屋市立大学と蒲郡市との再生医療の実施における相互協力に関する協定を締結」

平成30年7月26日に郡健二郎 理事長と稲葉正吉 蒲郡市長によって、名古屋市立大学と蒲郡市の「再生医療の実施における相互協力に関する協定書」の締結が行われました。

蒲郡市民病院と名古屋市立大学病院は、平成29年度に「特定臨床研究の実施に関する相互の協力・支援に関する協定」を締結しております。蒲郡市には医療用の細胞培養製品を開発・製造している企業（ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング:J-TEC）があり、蒲郡再生医療産業化推進委員会を設置するなど市全体で再生医療のまちづくりに取り組んでいます。一方、名古屋市立大学病院では、歯科口腔外科による「多血小板フィブリン（Platelet Rich Fibrin: PRF）を用いた歯槽骨造成」や形成外科と皮膚科による「白斑、



協定締結式

前列左から 蒲郡市民病院 河辺病院長、城最高経営責任者、蒲郡市 稲葉市長、名市大 郡理事長、丹羽事務局長、今泉理事

後列左から 蒲郡市民病院 中神事務局長、蒲郡市 飯島企画部長、名市大 道川医学研究科長、飯田副院長、神谷臨床研究開発支援センター長

改善が困難な癒痕、難治性潰瘍に対する培養表皮移植の有効性の検討」などの臨床研究が実施されています。

蒲郡市民病院に設置された特定認定再生医療等委員会と名古屋市立大学病院に設置されている認定臨床研究審査委員会による再生医療臨床研究の審査の迅速化、名古屋市立大学病院で実施されている再生医療研究への蒲郡市民病院の参加、そして市民を対象とした再生医療シンポジウムの共同開催など、両者の密接な協力は愛知県内における再生医療研究の活性化による医学の進歩や社会貢献につながる礎になることは間違いありません。これを機に、本学において再生医療に関する基礎研究と臨床研究が益々盛んになることを期待しております。

副病院長(研究担当) 飯田 真介

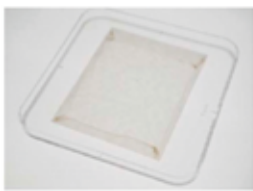
白斑、改善が困難な癒痕、難治性皮膚潰瘍に対する培養表皮移植の有効性の検討

白斑



細胞採取から移植まで

1. 健常部より切手大の皮膚を採取
2. 細胞培養加工施設に輸送
3. 表皮細胞を分け、栄養成分とともにシート状に育て、大きなシート状の皮膚（自家培養表皮）を作成
4. 必要な枚数を病変部に移植



メラノサイトを保持した自家培養表皮「ACE02」
J-TEC HPより

「瑞医の由来」

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPOINT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出航し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

教 育

蒲郡市民病院との連携強化を開始して

2018年7月に名古屋市立大学と蒲郡市は、再生医療の実施に関する協定を締結し、本学大学病院と蒲郡市民病院との連携のもと再生医療の推進にむけて新たに出発しました。地方自治体の病院に特定認定再生医療等委員会の設置が認められているのはまれです。さらに、そこで本格的に再生医療を実施するのは、わが国では初めてであり、再生医療都市を目指す蒲郡市の医療行政は全国的にも注目されています。

これに先立つ本年4月に名古屋市立大学病院は、蒲郡市と協定を締結しました。地域医療教育研究センターを開設し、蒲郡市民病院との強い連携のもとに地域包括医療の推進を開始しました。すなわち、本年4月に本学の城卓志・前病院長が蒲郡市民病院のCEOとして赴任するとともに、新たに同病院で診療・研究・教育に従事する本学医学研究科教員(教授、准教授、講師)を派遣する体制を整えました。7月までの短期間(4か月間)ではありますが、様々な面で大きな変化が起きています。

この新体制の効果は、まず病床稼働率に現れました。7月は昨年比10%、8月は20%の増加となっています(速報値)。この改善の流れは、新規入院患者数の増加(同比で300名弱の増加)、地域連携を通じた地域医師会からの紹介患者数の増加(同比で450名弱)としても現れています。こうした改善・発展が内実(医療レベルアップ、市民への還元)を伴っていたことは、患者満足度調査で大幅な向上(9・7%増)が見られていることで確認できます。

短期間で大きな改善をもたらしたことは、この連携強化が間違っていないことを物語っています。その根底には、蒲郡市民病院で勤務する多くの医師の皆様の努力や、それを支える蒲郡市民病院職員・医療関係者、蒲郡市、ならびに医師会の皆様の多大な御支援ご協力があったのは言うまでもないことであり、ここに深謝いたします。今後も、この連携強化によって双方が益々発展していけますよう一層の努力をしていきたいと存じます。



医学研究科長 道川 誠

地域医療教育研究センター 新任教員紹介



蒲郡市民病院 呼吸器科特別診療科部長 地域医療教育研究センター 教授(呼吸器内科) 小栗 鉄也

2018年4月1日より地域医療教育研究センターの教授を拝命しました。蒲郡市民病院呼吸器科特別診療科部長を兼務し、大学病院および蒲郡市民病院において診療・教育・研究活動を行うことになりました。

蒲郡市民病院は蒲郡市で唯一の急性期病院ですが、呼吸器内科医の常勤医が不在でありました。高齢化率も高い地域であり、呼吸器疾患に対する診療のニーズも高いことから、大学で培った診療レベルをもとに、この地域の呼吸器疾患の診療に従事するとともに、大学と蒲郡市民病院の様々な面での橋渡しができるように努めてまいります。今後とも皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



蒲郡市民病院 泌尿器科特別診療科部長 地域医療教育研究センター 講師(泌尿器科) 中根 明宏

この度、地域医療教育研究センター講師(診療担当)として、蒲郡市民病院泌尿器科での診療を拝命しました中根明宏です。謹んでご挨拶申し上げます。今まで蒲郡市民病院泌尿器科は常勤医師が不在でしたので、一から診療体制を構築できる機会を得ました。大きなやりがいとともに責任のある業務であり、身の引き締まる思いです。名古屋市立大学と連携した診療や研修医教育、臨床研究を行うことを基本とし、蒲郡の地で名古屋市立大学と同等の先進的な医療に取り組む事で、「地域医療教育研究センター」の名に恥じない地域での貢献をすることを目標にして、全力で取り組む所存です。今後ともご指導いただけますようお願い申し上げます。



蒲郡市民病院 消化器科特別診療科主任 地域医療教育研究センター 講師(消化器内科) 稲垣 佑祐

このたび地域医療教育センター講師を拝命致しました稲垣と申します。週4日は蒲郡市民病院の内科医として、1日は大学病院の内視鏡室で勤務しています。

地域医療教育センターとは名古屋市立大学と蒲郡市が連携をして医療・教育・研究を行っていくものです。現在大学から蒲郡市民病院には多くの先生方に外来、検査などのお手伝いをさせていただいております。また個人的にも私が蒲郡に赴任してから約4ヶ月の間に名古屋市立大学病院の肝臓内科、消化器外科にそれぞれ難しい症例を1例ずつお願いして対応していただきました。

今後も大学と連携して蒲郡周辺地域の皆様に対する医療だけでなく教育研究分野においても貢献できるよう微力ながら尽力したいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

臨床病態病理学

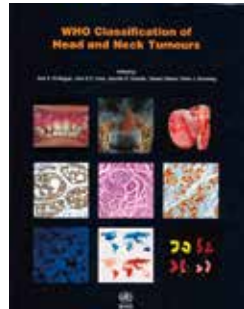
病理診断は“最終診断”としてしばしば患者治療に決定的な影響を与えますが、当教室では、治療に直結する病理診断学を専門にし、幅広い分野の診断・研究を行っています。現在のメンバーは 教授 稲垣宏、准教授 村瀬貴幸、講師 正木彩子、助教 津田香那、技術職員 榎原健夫、坂本祐真、博士課程大学院生6名、MD-PhDコース学生4名、研究員11名、実験助手1名、秘書3名です。

当教室では造血器、頭頸部、呼吸器、縦隔、消化器、軟部組織などの腫瘍性および反応性病変を研究対象とし、病態発生機序の解明、疾患単位・概念の確立および病理診断、治療選択、予後推定などに重要な分子マーカーを同定しています。特に力を入れている分野は、悪性リンパ腫を中心とする血液病理学と唾液腺腫瘍を中心とする頭頸部病理学です。

悪性リンパ腫は病理診断により治療方針が変わるため、病理診断は非常に重要です。当教室が診断している悪性リンパ腫症例は名古屋市立大学病院および他施設からの症例を合わせ、年間1000症例以上に及びます。最近では、成人T細胞性白血病・リンパ腫に対するヒト抗CCR4抗体治療薬の効果を予測する遺伝子変異を解明し発表しました(Sakamoto Y, et al. Blood. 2018;132:758-761. PMID: 29930010)。本研究は中日新聞(2018年7月31日朝刊)にも取り上げられました。また2018年6月からは悪性リンパ腫を主な研究対象領域とする日本リンパ網内系学会の事務局を務めさせていただいています。



BLOOD
2018j132(7)



2017年
頭頸部腫瘍 WHO分類

唾液腺腫瘍は比較的稀ですが、診断・予後推定の難しい腫瘍です。これらの腫瘍に対して、年間250例以上の診断を行っています。教室員の努力により、これまで診断・予後推定に有用な遺伝子異常を多数発表してきました。2017年に刊行された頭頸部腫瘍WHO分類では、唾液腺腫瘍の4つの項で執筆に参画しています。

臨床病態病理学 教授 稲垣 宏



臨床病態病理学のみなさん
(最前列:左より村瀬准教授、稲垣教授)

呼吸器・免疫アレルギー内科学

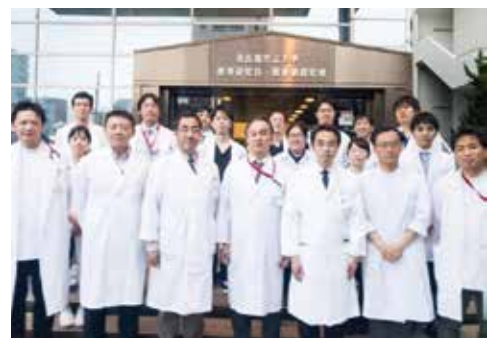
当分野は、呼吸器疾患(喘息、慢性咳嗽、肺癌、慢性閉塞性肺疾患、肺炎・非結核性抗酸菌症などの感染症、間質性肺疾患など)と、膠原病・リウマチ性疾患を中心とする全身性疾患(関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、強皮症、多発性筋炎・皮膚筋炎、血管炎症候群など)を守備範囲とする内科学教室です。

大学病院では、呼吸器・アレルギー内科と、リウマチ・膠原病内科に加えて、感染制御室とも共同して診療に当たっており、患者さんにやさしくかつ最先端の医療提供がなされています。

研究面においては、呼吸器・アレルギー内科では、難治性喘息や慢性咳嗽の病態および治療について、肺癌における抗癌剤耐性機序、肺癌治療標的分子の解明やその効果的な治療法、間質性肺炎の画像解析や抗線維化薬の作用機序の解明、非結核性抗酸菌症の病態と抗菌化学療法に関する研究を行っています。リウマチ・膠原病内科では、マウスを用いた免疫寛容の誘導に関する基礎的研究、膠原病のT細胞表面マーカーに関する臨床研究、関節リウマチ完全寛解を目指した管理・治療に関する臨床研究に取り組んでいます。

教室員は呼吸器・アレルギー内科およびリウマチ内科のそれぞれのグループのなかで、独自の診療、教育、研究活動を行っていますが、まず臨床第一、患者さん第一というのが教室全体の基本方針です。常に患者さんの立場に立って物事を考え、患者さんのために全力を尽くすことができる医師の育成を目指しています。その上で、日々の診療から得た疑問点を解決するべく研究にも取り組んでいます。

呼吸器・免疫アレルギー内科学 講師 竹村 昌也



呼吸器・免疫アレルギー内科学のみなさん

新任教授のご紹介

麻酔科学分野— 杉浦 健之 教授

このたび、本学附属病院のいたみセンター長、教授(診療担当)を拝命いたしました杉浦健之(すぎうらたけし)と申します。大変光栄なことに、瑞医に原稿を載せていただくのは2011年2月号の研究者紹介に続き二回め、さらに今回は、いたみセンターも同時に取り上げていただいております。

私は、1987年に名古屋市立大医学部に入学、“痛みの臨床・研究”に対して興味を抱いていたこともあり、卒後は勝屋弘忠教授が運営されていた麻酔・蘇生学分野で研修を始めさせていただきました。東海地区で最も古い歴史を持つ名市大ペインクリニックでは、津田喬子先生に職人技の神経ブロック手技をはじめ診療全般を学びました。当時の治療現場では神経ブロックが全盛期で、確かに神経ブロックは切れ味がよく、治療に大変満足される患者もたくさん見てまいりました。しかし、中には神経ブロックや一般的な鎮痛薬では全く歯が立たない、治療に難渋する慢性痛患者にも遭遇しました。そんな時には、無力感と他の知識や診療技術の必要性を嫌という程感じておりました。風向きが変わってきたのは、慢性痛対策の重要性が国レベルで考えられ始めた頃からです(慢性の痛み対策に対する提言)。そして2017年、明智龍男教授、和田郁男教授、祖父江和哉教授の御尽力で、様々な専門知識を持った多職種スタッフがいたみセンターに集まり、一人の患者を多面的に評価、それぞれの専門的な技術を駆使し慢性痛患者を診ることができ体制が整いました。現在、当院いたみセンターは厚労省の慢性疼痛モデル事業に参画し、慢性痛診療体制の構築など複数の事業を進めており、また文科省人材養成プログラムにおいて慢性疼痛診療に関わる医療スタッフの人材育成の臨床実地の場としても活用しています。このような立派な診療環境を整えていただいた関係の皆様紙面をお借りし、改めて感謝申し上げます。引き続き、様々な痛みに苦悩される患者に質の高い医療を提供することはもちろん、痛みの研究分野でも努力してまいります。今後とも、どうぞお力添えのほど、よろしくお願い申し上げます。



杉浦 健之 教授

内分泌・糖尿病内科学分野— 今枝 憲郎 教授

この度2018年1月1日付で名古屋市立西部医療センター内分泌・糖尿病内科部長を拝命し、同年4月1日付で名古屋市立大学大学院医学研究科高度医療教育研究センター教授を拝命いたしました。謹んでご挨拶申し上げます。

私は1989年に名古屋市立大学医学部を卒業し、当時の第一内科に入局しました。市大病院で1年間研修の後に、知多厚生病院内科で4年間内科全般について研鑽を積みました。大学院時代には当時の第一生理学教室との共同研究で消化管運動における電気生理学的研究を行い、1999年に学位を取得しました。その後、2年間英国オックスフォード大学薬理学教室に留学し、消化管の括約筋における生理活性因子の影響を研究しました。帰国後に正式に内分泌糖尿病内科領域に従事し、2016年、2017年の2年間は消化器代謝内科学准教授および内分泌糖尿病内科部長を勤めさせていただきました。そして、2018年より現職に従事しています。

名市大病院勤務時代は基礎的研究では糖尿病における消化管運動障害や内分泌因子と消化管運動の関係について検討してきました。臨床研究ではDPP-4阻害薬やSGLT2阻害薬など最近の薬剤を用いた臨床試験を行ってきました。

現在、西部医療センターでは病院の特徴を生かした生育領域の内分泌糖尿病治療に力を入れながら、さらに研修医指導やM6学外実習にも精力的に取り組んでいます。また、高度医療教育研究センターの一員として名古屋市立大学病院で甲状腺に関するM5のBSLを担当しています。微力ではありますが、臨床や医学教育の視点から市大・東部・西部の3病院の融合に貢献できるように励んでいきたいと思っております。今後とも皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



今枝 憲郎 教授

新任教授のご紹介

麻酔科学分野 — 伊藤 彰師 教授

この度、2018年4月1日付で、高度医療教育研究センター教授(麻酔・集中治療科)を拝命いたしました。謹んでご挨拶申し上げます。

私は、1987年に名古屋市立大学医学部を卒業し、麻酔・蘇生学に入局しました。大学病院、安城更生病院、名古屋第二赤十字病院、岐阜県立多治見病院で勤務した後、1999年からは大学病院で教員となり、診療、研究、教育に従事し、その間、カナダトロント大学麻酔科に留学させていただきました。研究テーマは「呼吸生理」で、とくに呼気ガスCO₂分析による各種パラメータ計測、PaCO₂コントロール法などの研究に取り組みました。2008年からは大学病院集中治療部准教授として勤務させていただきました。2012年には名古屋市立東部医療センターに赴任し、集中治療部の立ち上げに携わりました。現在、麻酔・集中治療科部長、集中治療センター長として勤務しています。外部病院では、診療、教育(研修医、学生)はそれなりにできているつもりですが、研究については残念ながらマインドは低下し疎かになりがちです。高度医療教育研究センター教授の就任にあたり、診療、教育だけでなく研究についても力を注いでいきたいと思えます。高度医療教育研究センター開設の目的は、総病床数1800床のスケールを活かした高いレベルの医療・研究・人材育成の実現とされています。この高度医療教育研究センターの一員として、微力ながらも、東部、西部医療センターを含めた名古屋市立大学病院グループのさらなる発展に寄与できれば幸いです。今後ともご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



伊藤 彰師 教授

若手の期待の星

産科婦人科学分野 — 森 亮介 医員

妊娠できない不妊症に対して、「妊娠はするけれど流産・死産によって生児が得られない状態」を不育症といいます。不育症の原因として抗リン脂質抗体、子宮奇形、夫婦染色体均衡型転座、胎児染色体異常があり、原因不明不育症は25%であることがわかってきました。この原因不明不育症に関する研究が名市大産婦人科では伝統的に盛んに行われています。

私の研究テーマは「菌叢解析による感染型不育症の病態解明と治療法の確立」です。最近、話題となることが多い腸内の細菌叢については近年の研究にて次世代シーケンサーを用いた菌叢解析を行うことによりこれまで培養などでは検出が難しかった2型糖尿病やうつ病などに特異的な菌、菌叢が報告されてきています。この技術を不育症にも応用し原因不明不育症に対し腔内細菌の菌叢解析を行い、流産を引き起こす特異的な菌、菌叢を明らかにするという、これまでにない新しいアプローチで原因不明不育症の病態解明を試みる非常にやりがいのあるテーマと考えております。この研究は菌叢解析という次世代シーケンサーを用いた新しい技術を用いることもあり愛知県犬山市にあります京都大学霊長類研究所のご協力をいただき霊長類研究所との共同研究として研究させていただいております。サルやチンパンジーの鳴き声に囲まれながらピペットを扱うという非日常の中、研究に取り組んでいます。



森 亮介 医員

新しい技術を用いた研究ということもあり困難に直面する機会も多いですが将来的に不育症で悩む患者さんになにか貢献できるような結果が得られると信じこれからも研究に専念させていただきます。

いたみセンターの紹介

副センター長 近藤真前

2017年4月、従来の麻酔科外来・ペインクリニックを発展させ、中央部門として「いたみセンター」が開設されました。平成28年度文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」に名古屋市立大学の「慢性疼痛患者の生きる力を支える人材育成」プロジェクト(プロジェクトリーダー:明智龍男 精神科教授)が選定され、学生および社会人に対する慢性痛の教育・研修を目的として設置されたものです。

いたみセンターでは、主に慢性痛(3ヶ月以上持続する痛み)に対する多職種チーム医療を行っています。なお、急性痛(3ヶ月未満の痛み)も今までどおり受け入れています。

慢性痛に対する多職種チーム医療とは?

慢性痛には、身体的要因の他に、運動・動作などの生活習慣、不安や抑うつなどの心理的要因、就労状況や家庭環境などの社会的要因が複雑に関係しています。

多面的な評価・治療が必要なため、いたみセンターでは麻酔科医、リハビリ科医、精神科医、理学療法士、臨床心理士、看護師による多職種チームで診療にあたっています。

慢性痛は、週1名・完全紹介予約制の「慢性痛初診」で受け入れています。下図のように初診で3~5時間かけて多職種で評価を行い、多職種カンファレンスで方針を決定します。なお、このカンファレンスには医学部・薬学部の学生が実習で参加し、多職種チーム医療を学ぶ場所ともなっています。

そして必要な場合は整形外科的評価のあと、治療を行います。患者さんは治療後は原則として紹介元に戻ります。



慢性痛初診 (計3~5時間)



多職種カンファレンスで方針決定



前列左から 春原啓一(東部医療センター疼痛緩和と支持治療科医師)、近藤真前(精神科医師・副センター長)、杉浦健之(麻酔科医師・センター長)、水谷潤(整形外科医師・副センター長)

中列左から 飯田裕子(看護師)、酒井美枝(臨床心理士)、太田晴子(麻酔科医師)、森杉晶世(看護師)

後列左から 黒柳元(整形外科・リハビリ科医師)、加古英介(麻酔科医師)、長谷川貴昭(緩和ケア部医師)、鹿島崇人(理学療法士)、衣川澄礼(臨床心理士)

慢性痛の治療とは?

急性痛とは全く異なり、慢性痛には多職種による集学的治療を行います。主な治療は3種類あります。

①神経ブロック、薬物療法(麻酔科医、看護師)

急性痛では、神経ブロックは大変有用な治療法の一つです。痛くて動けない患者が、ブロック後に笑顔で帰れることもあります。一方、慢性痛では中・長期の改善度を指標にした場合、ブロックの適応は少なく慎重に検討されます。リハビリを円滑に進める補助として行う時もあります。さらに難治性疼痛に対する侵襲的治療として、脊髄硬膜外腔に電極を留置して脊髄を刺激する治療も行なっています。



神経ブロック

②認知行動療法(臨床心理士、精神科医)

認知行動療法は、現在、世界でスタンダードとなっている心理療法です。うつ病や不安障害などの精神疾患だけでなく、慢性痛や慢性めまいなどの機能的な身体疾患にも有効性が示されています。名市大精神科は我が国で有数の認知行動療法の臨床・研究施設であり、その経験を活かして慢性痛に対して認知行動療法を実施し、臨床研究を行っています。



認知行動療法

③理学療法・運動療法(理学療法士、リハビリ科医)

痛みによる不動や運動恐怖によって、柔軟性や可動域低下、筋緊張の亢進などが生じている慢性痛患者さんを、リハビリ医と整形外科医が器質的疾患を的確に診断するとともに、理学療法士によって、慢性痛患者さんが“痛いからできない”のではなく“痛いけどこれだけできた”と疼痛を受容しつつコンディショニングを高め生活習慣の改善につなげる治療を行っています。



理学療法

「いたみに対する多職種チーム医療と人材育成を行います」

いたみセンターが開設され、当院および当地域における慢性痛診療はさらに進化を遂げました。慢性痛患者さんに対して最適な集学的治療を提供し、人材を育成できるよう尽力してまいります。当センターの多職種チームは和気あいあいとした雰囲気、高いレベルの集学的治療を目指しています。痛み治療に興味のある方、ぜひ一緒に取り組みましょう!

センター長 杉浦 健之

学生生活（国際交流）

ハルリム大学

医学部では国際交流協定に基づく学生交流の一環として、協定校の韓国ハルリム大学より毎年2名の留学生を受け入れています。今年は男子学生2名が、7/2～7/27の4週間、本学の5年生と一緒に病院での臨床実習に参加しました。なお、本学からは3年時に研究室に所属して医学研究を行う「基礎自主研修」でハルリム大学に学生を派遣しています。

初日には、道川医学研究科長より激励の言葉をいただき、実習を開始しました。（右）は面談時の写真です。

実習する診療科については留学生に希望を取り、2週間ずつ2つの診療科をまわりました。一人は循環器内科と脳神経外科、もう一人は消化器内科と産婦人科です。初めは慣れない環境や日本語を交えたコミュニケーションに緊張していた2人でしたが、次第に慣れて充実した様子で実習に取り組んでいました。また、他国で同じ医師という職業を志す意欲ある留学生とともに実習をすることは、本学の5年生にとっても良い刺激となったようでした。このような実りある交流のために、留学生を受け入れてくださった診療科の先生方をはじめ、医局の皆様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。

教育研究課 医療人育成係 林 マリ子



右から道川研究科長、チョンさん、チェさん



面談時の様子

ボンド大学との学部間交流協定の締結について

平成30年7月10日、ボンド大学（オーストラリア）からSellers准教授と2名の大学院生を迎え、道川医学研究科長、澤本教授（国際交流委員会委員長）および本学側代表研究者の橋谷が出席し、和やかな雰囲気の中で学部間交流協定締結の調印式が行われました。先方の代表研究者であるChess-Williams教授（泌尿器疾患研究所所長）とは10年来の交流があり、ここ数年は相互訪問による共同研究や学会でのシンポジウム共催を行っています。

昨年度の基礎自主研修では2名の医学部3年生を派遣し、今年度も2名の学生が派遣に向けて現在準備を進めています。ボンド大学には再生医学研究所も設置されており、今後より広い研究分野での学术交流、学部生・大学院生の相互派遣などへの発展が期待されます。ゴールドコーストという立地からスポーツが非常に盛んな大学で、競泳1500mの元世界記録保持者（オリンピック2連覇）のGrant Hackettなど数々の名選手を輩出しています。南半球の太陽の下、多国籍、多民族の学生と教員が集うボンド大学を是非訪れてみて下さい。



前列左からSellers准教授、道川研究科長
後列左から橋谷教授、大学院生（2名）、澤本教授

細胞生理学分野学 教授 橋谷 光

サントトーマス大学

加齢・環境皮膚科学分野に、大学間交流協定校であるフィリピン・マニラのサントトーマス大学からの留学生2名が、6月から7月にかけての6週間滞在しました。19歳のSanchezさんと20歳のVitanさんは大学では物理学を専攻していますが、将来は医者になりたい（フィリピンでは一般の大学卒業後に医学部入学が可能になる）そうで、本学医学部の学生さんに交じて外来、病棟、手術と、当科の医療をしっかりと見学してもらいました。また、大学院生に教えてもらいながら基礎研究にも挑戦しました。紫外線照射後の遺伝子発現解析を行う皮膚老化研究の一端でしたが、興味を持ってくれたようです。初めてのことばかりで大変だったと思いますが、何事にも明るく元気に挑戦し、すっかり人気者（特に男子学生から）になり、医局員や学生さんの英語の勉強にも付き合ってくれていました。写真は実験中の様子でと医局の皆と研修医、学生さんで行ったバーベキューです。医者になったら是非また留学に来てもらい、一緒に働きたいですね。



実験中の様子とバーベキューの様子

加齢・環境皮膚科学 助教 中村 元樹

蝶ヶ岳ボランティア診療所

蝶ヶ岳ボランティア診療所は7月16日(月)から8月19日(日)(5週間)に受診者134名(高山病、外傷、虫刺症、筋肉痛・関節痛、その他、ヘリ搬送1名)の診療にあたりました。参加学生76名、医療スタッフ等61名のご協力をいただきました。三股登山口(長野県安曇野市)へのアクセス道路の崩落に伴い、本年は全ての学生班を上高地ルートに変更しました。徳沢ロッジ、徳澤園、蝶ヶ岳ヒュッテ、参加スタッフと学生をはじめ関係者のご理解とご協力により適切に対応することができました。研究面では、「蝶ヶ岳での登山中の水分摂取量と急性高山病発症との関連」が専門誌「登山医学」(37: 144-149, 2017)に掲載され、これを発展させた研究成果を投稿準備中です。多くの方々のご協力によりこれまでに3,000名近くの患者診療にたずさわってきた実績があります。私たちはこの歴史を糧にしてこれからの新たな歩みを進めます。皆様には今後も本活動へのサポートを何卒よろしくお願い致します。



学生の手で山岳医療をささえる～「名古屋市立大学蝶ヶ岳ボランティア診療所」のプレートの前で開所の挨拶をする羽柴班長(7.16.2018)

分子毒性学 教授 酒々井 眞澄

夏のオープンキャンパス、今年も大盛況!

8月3日(金)。名古屋市の最高気温が観測史上初40.3度を記録した歴史的酷暑のこの日。危険な暑さにも関わらず、高校生や保護者、総勢709名が参加。より多くの人たちに名市大医学部の魅力を届けたいという熱い思いから、今年初めて午前と午後の二部制で実施しました。

恒例の模擬講義は内容を一新。名市大で学ぶことの素晴らしさや医学の大切さを熱く講義。真剣に耳を傾ける高校生の姿がとても印象的でした。

また、本医学部をより身近に体感できる新企画も用意。在学生有志協力のもと「入試相談コーナー」や「BLS(一次救命処置)体験コーナー」を設置。参加した高校生らは先輩から直接生の声を聞ける貴重な機会に。他にも、飛田秀樹副研究科長(入試担当)が保護者の様々な質問に丁寧に回答する場面や、「名市大どら焼」の出張販売など盛りだくさん。この夏一番のイベントとなりました。



①松川教授模擬講義 ②飛田教授と保護者
③在学生による入試相談 ④BLS体験

平成30年度—最新医学講座— オープンカレッジ

オープンカレッジ 第3期「脳疾患の最先端治療」

本講座では、医学について、本学の各専門分野が蓄積している最新の教育研究情報を、わかりやすく解説します。

開催日時 平成30年11月9日～平成31年1月18日
各金曜日 午後6時30分～8時 全8回
(平成30年11月23日、12月28日、平成31年1月4日は除く)

開催場所 桜山キャンパス 医学研究科・医学研究棟11階 講義室A

募集対象 一般 **定員** 80名 **受講料** 8,000円

応募方法

往復はがきまたはeメール
平成30年10月1日(月)～平成30年10月19日(金)(締切)
詳細は9月下旬頃ホームページに掲載予定

URL: <http://www.nagoya-cu.ac.jp/med/index.html>

問い合わせ先

名古屋市立大学教育研究課 オープンカレッジ担当
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 TEL:052-853-8077 eメール:igakubuoc@sec.nagoya-cu.ac.jp

ひとこと☆メッセージ募集!

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!無沙汰している同級生に、恩師に…ワイワイ楽しいお便りお待ちしております。ほっと和む「名市大人のつぶやきコーナー」をみなさんと作りたいと思います。

例えばこんな一言を、

研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」
ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」
新米医師のつぶやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」
などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は9月号です)

1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) *匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。*4.住所 5.電話番号またはE-mailアドレス

《受付》〒467-8602 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地 名古屋市立大学 医学・病院管理部
経営課経営係 広報担当宛 E-Mail:hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp

お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使用いたしません

広報誌：瑞医(ずいい)
発行：〒467-8602
名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地
TEL(052)858-7114 FAX(052)851-4801

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp/>

※次号の発行は2019年1月下旬発行予定です。[年3回 1月・5月・9月]

☐☐
我こそは
通信員!

広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、E-Mail:hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp
医学・病院管理部経営課経営係 広報担当まで